熊本・上高橋高田遺跡（かみたかはしこうだ）

1 所在地　熊本市上高橋町
2 調査期間　一九九〇年（平2）三月～一九九一年五月
3 発掘機関　熊本市教育委員会
4 調査担当者　網田龍生
5 遺跡の種類　集落跡
6 遺跡の年代　縄文時代後期～鎌倉時代前半
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

上高橋高田遺跡は、熊本平野北部を流れる井芹川・坪井川の合流地点の東側に位置する。両河川とも後世の流路である。三方を山で囲まれた低湿地で、標高三m前後である。調査区の東は独鈷山と呼ばれる標高一一八mの山に接し、この山は名が示すとおり宗教色の濃い山で、経筒なども発見されている。調査区北側は、金峰山山系の山々が連なり、そこでは古代から修験道が盛んであった。その山中には、古代山岳密教寺院である池辺寺址も存在する。西側の高橋町は、古代から貿易港として栄えていたと考えられる。このように、当時の上高橋高田遺跡周辺は、肥後における貿易の拠点であると同時に、修験道ルートの入口にもあたり、池辺寺・独鈷山など当時の宗教上の拠点でもあったことがうかがえる。

（熊　本）

今回の調査は、市営団地建設に伴うものである。発掘調査の結果、弥生時代中期、古墳時代前期、平安時代前期、平安時代末に住居・墓が営まれた地域を、一三世紀後半に洪水が襲ったことがわかった。その堆積土の中には縄文時代後期から一三世紀後半までの大量の遺物が含まれる。木簡は、その堆積土から出土している。よって土層から木簡の時期を特定することはできないが、内容から一三世紀後半と考えてよいと思われる。この時期の遺物では、他に青磁・白磁、漆器・曲物などの木製品がある。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「（符籙）急々如律令」　253×(48)×4　081

この木簡は前述のとおり、洪水によると思われる堆積土から出土したものである。左側を欠損しており、全体の字数はつかめない。地表下約三〇cmと浅い位置にあったため傷みがひどいのであろう。文字は上部は明瞭であるが、下部はかろうじて読める程度である。裏面には墨書はない。上部は「口」を線で結び、その下に「月」を

横に並べ、さらに「鬼」を書く符籙である。

もう一点、墨書は確認できないが、木簡状木製品がある。長さ二五〇㎜、幅一五～二八㎜で、一端の左右に切り込みがあり、墨書はない。出土状況は(1)と全く同じである。

他にも墨書をもつ木製品として、曲物など数点があるが、整理中のため、現段階での報告は右記のみにとどめたい。

（網田龍生）

木簡研究 第九号

巻頭言　田中 稔

一九八六年出土の木簡
概要　平城宮・京跡　興福寺旧境内　藤原京跡　和田廃寺　橘寺　曲川遺跡　長岡京跡(1)　長岡京跡(2)　長岡京跡(3)　長岡京跡(4)　平安京右京三条二坊八町　平安京右京五条一坊三町　平安京右京五条一坊六町　平安京右京八条二坊二町　平安京右京八条二坊十二町　伏見城跡　大坂城跡　安堂遺跡　津田トッパナ遺跡　萱振A遺跡　祢布ケ森遺跡　但馬国府推定地　初田館跡　福田片岡遺跡　清洲城下町遺跡(1)　清洲城下町遺跡(2)　居倉遺跡　土橋遺跡　駿府城三の丸跡　東京大学構内遺跡　浜野川遺跡　神照寺坊遺跡　浄琳寺遺跡　光相寺遺跡　吉地薬師堂遺跡　胆沢城跡　根城跡　生石2遺跡　新青渡遺跡　払田柵跡　田名遺跡　曽万布遺跡　辻遺跡　富田川河床遺跡　草戸千軒町遺跡　周防国府跡　中島田遺跡　大宰府跡　井相田C遺跡　吉野ケ里遺跡　稲岡耕二

一九七七年以前出土の木簡（九）
平城宮跡（第三二次補足調査）　大庭 脩

国語の表記史と森ノ内遺跡木簡　佐藤宗諄・橋本義則

敦煌凌胡隙址出土冊書の復原　東野治之

漆紙文書集成
正倉院木簡の用途――原秀三郎氏の所説に接して――　平野邦雄

岸俊男会長の思い出

彙報

頒価　三八〇〇円　〒四〇〇円